

藩鑑

本多

七十四



庫文閣内	
三五九 函一 二架	三四六 八二號 二八冊
和書	

内閣文庫	
番號	和 34682
冊數	278 ( 75 )
函號	159 1

藩鑑卷之百十六目錄

序部二十八

中多中勢大補後系忠勝



藩鑑卷之百十六

中務大輔藤原忠勝

一 天正十八年秀吉東征北條氏直圍相州

小田原

大權現率兵會之忠勝供奉守一方濱手

秀吉謂

大權現曰小田原被圍已久逐日可困窮

然關東諸城猶是屬北條也公為我計之  
大權現召忠勝曰北條左衛門大夫最前  
守山中城城陷後蟄居玉繩城汝宜謀以  
降之忠勝歸陣屋呼都築彌左衛門相議  
而使都築往玉繩使其叔父僧了達說左  
衛門大夫以籠城難守之事左衛門大夫  
從之依忠勝請降獻質到小田原逢忠勝  
忠勝為之先容以拜

大權現而後謁秀吉秀吉感悅之曰忠勝  
智畧最善

得川殿多用名士善哉

中多忠勝譜

一天正十八年六月のころ秀吉より

東照宮へ乞ふし依し中多中務大輔

上総下総兩國の志とてして廳南城と

中

創業記考矣

一秀吉公小田原五年より入奥州白川まで



家康よりあか多中書りり金子細い元年  
長久手合戦のとき池田勝入父子森茂死  
す

家康よりうちとくし無念玉極よて  
数万の人数よて早く樂田と立長久手  
へ延命

家康腹足へ仕然いんとして操よもん  
てありゆとさ中書り小牧より長久手

へ赴く途中よて秀吉と四五町と阻て  
並押よ中書りよ五百餘騎よて  
少ししひりますし卒よ下知して  
爰よて秀吉といとみ戦ふとさハ推  
前の方とあり秀吉長久手へかけつく  
よ滞出来長久手表  
家康十分の勝よ成へて爰よて秀吉  
とさへり止めりち死して上方勢と



長久寺一避滞させんとありて  
五百餘の小軍よして秀吉旗もと十萬の  
陣へひくといつとみ我ハ秣鹿之野とか  
けたり諸大將と付とくんと望み  
——くとも秀吉許さす軍相並んで  
二里餘り行つたたり藤の角れ曹長  
石氏者一騎川岸へ寄り一馬の口と洗  
つす秀吉乞と見して大將分の者と見

之たり何者と誰も見知さくると聞  
よ稲葉豫州見知て千多平八よして  
とや上ら秀吉乞之すして涙こぼし  
皆くよやすい平八郎柳川よして先陣  
とつけ相倉一萬の中へ馬と入さく  
よ我功まのめりよ見たり只今  
彼ら小勢と以てし秀吉大軍よ敵討せ  
んやあつたよ並ハ推甲さしてひくと合

我よりりかくる。秀吉より多る。とせ  
家康より合戦と仕とせん。とりり古今の  
勇士忠義の士りり。只今年八と付。再も  
秀吉運極。軍より。負へ。と云  
家康数万の勇士と指。とも秀吉運強。い  
軍より。勝ん。必く年八と付。事あり。ま。と夫  
止せ。一あり。は。と。忠勝。忠信。よ。も  
減。よ。ま。さ。ま。り。と。思。ふ。は。甲。一。よ。忠。信。の

曹と。中書より。と。と。せ。んと。作。せ。と。せ  
生。翌。日。沸。前。一。五。一。後。く。作。ま。と。ま。か。の。曹  
と。中。書。より。下。さ。ま。け。る。生。晚。秀。吉。と。又。中。書  
を。石。て。作。手。前。よ。て。作。茶。り。さ。ま。ま。よ。  
て。ひ。と。り。よ。作。聞。ら。り。い。海。の。武。勇。人。乞  
と。知。ら。と。之。と。も。名。と。天。り。よ。知。と。一。め  
忠。信。の。曹。と。く。ま。大。剛。一。の。兵。と。日。本。國。中  
よ。披。露。せ。一。い。秀。吉。を。思。り。り。あ。り。ま。し。は。



家康恩と秀吉を思ふといふの事深きと  
此忠勝流と此一つけしとくし上  
す此秀吉志ありは此岡つめあさしと  
さ中書派と流一今の此海一りも  
深く此とも

家康の徳代のまよして此岡一りも  
しつとす此と一り秀吉と此様  
あ一く此流と立せしと一りよて

中書とあめたりとと  
武邊心園書  
古蹟実録

一 此多忠勝よ秀吉忠信の曹と賜りら  
とも此へる色あ一いつと一り  
とよ忠信の武勇さのよ羨ま一くも  
あ一主君と作さ一九郎判官も吾等  
位も同一此世の家よ皆く一り麻の  
角此曹ことよけしとつと一とと  
後忠信の曹は次男忠朝よ譲り麻の角

れ曹の嫡子忠政よ甲つゝ是よりさ  
忠朝も男ふ而やありけんその曹よ穢  
もつけたりて捨棄せしとと常山  
先傳

鳥有秘記

一 大園家の人れ物語よ秀吉公

家康公和平まゝますの後  
家康公より中勢と使とて  
しつゝ秀吉公對面しつゝして後引出

物とりしつゝ定家の色紙あまのこ  
の紙吉光の服さし作後忠信の曹右  
れ三種とたまはり中勢分の思とあり  
就中忠信の曹と一入よりこしんと思  
右さつゝは收氣の色人へさつゝ不審  
と立しつゝ内證如何極し思ふ而あり  
らん相口ありあしよ問せしとありし  
る証けし中勢より白く曹孫故より

過分なりさして又忠信の曹としてとせ  
と満足よ、存せす、壬子細、我忠信よ  
劣る、さ事ふけ、あやうく、さとも  
存せす

家康よ、對して忠信より、まさりい、  
忠節の、も、ら、さ、敵、仕、り、あ、る、  
と、さ、何、と、忠、信、の、曹、と、あ、り、し、く、  
存、す、(、さ、お、大、岡、一、り、曹、と、あ、り、し、く、

忠志過分なりとし、存すとす、  
れ、大、岡、岡、と、さ、ま、し、て、し、ち、大、岡、の  
者、く、あ、

家康、能、さ、内、の、者、と、指、さ、り、美、ま、  
さ、事、あり、と、の、ま、ひ、一、り、傳、り

傳、  
翁物語  
語、夜、話

一、大、神、君、伏、見、向、富、の、正、面、敵、よ、正、座、の、と  
さ、或、と、さ、大、地、震、の、志、け、ら、い、と、さ、大

園秀吉公一也見奉とて一也登城あり  
いされ也對面ありけし一秀吉公

内府早く申しけし事ありさ次第あり  
と宣ふ

大神君のわとの地震よ也氣内の儀有  
よくこと存すしと仰せけし一也

内府よくも告しけし一事よ仰し  
まゝせ氣内ありしとのゝまひけし

大神君のわとの儀と申す一と申す  
ありけし一大神のや儀よ一及し

内府の儀ありさ一と存しけし成りて儀  
教輩井伴兵部下平八と五つしゆと  
仰しけし一

内府の儀とかり

内府と同道一氣内しけし一と有

けせい

内府公憚り多く少くとも正意に任す

一として正同道よして京越之赴を後

手道程二里餘りありさて大岡正意

一

内府公正意よ正徳一とまひを次

兵部平八列して何せも正徳初

氣内あるはとと平八思ふや今こと

ハ

よさ時常天のめくへかりい

て大岡と叙しきんとおもひ

神君の正徳と叙し引て目くをせ

うちよまくととの儀わりけ

神君正徳とかりつりよまひて平八

あまませよまひけり平八今こと幸

あまやせ付よまひと一人氣とせ

けせとも叶はす齒さ一正一して正徳



すは新と、大園も名物あるは目あり  
よて此境——知く是けとも知く好  
教よて此く

内府と此境ありて新のまゝ内よ  
大園

内府ふ一のこまやう、今日、不思議  
よ

内府と同道——且久——ありよて歩行

ソ、すこと新——く——て興あり  
氣も——とちありあつとも久  
——く歩行よてたおとさく新、刀骨  
殊のわ、ソ、み難儀ソ、すと作せ  
ら、是別ち此刀と好、せ、此正徳の元  
よ、持せ給も是として

内府よ、激——、平八は新と見  
て、あさよ、悦ひと、我よ、激——



よつとらー大園と一符よーかん物と  
思ひ居けらよ  
神君此名物あは平八のふとさうー  
まひ平八よ、後させよ、まひーて井  
伴兵部よ、後さすまひけは、平八あよ  
悔みけはとも甲斐あーまうあ徳さ  
京よ、あは、各糸内あり、此等礼滞て  
まひよ、還滞首尾よく仕よ、まひけら

翌日

内府公の方へ大園より、此候と下さきて、  
平八と右さゆよーと、此候中けは、  
内府らも、まひと、思右ー昨日の御と、此後  
あり、しりとは、是之たり、是よ、候て、付  
捨よ、まひん、まひの、右ありと、思右、あ  
まよ、あけ、まひ、あは、まひ、まひ、別、あ、平  
八と

内府公御前よめ——て汝と大岡百十  
事、昨日の参礼とんごまひ報——いま  
らんりち——我もは一事よめくん  
しりあまとも百外まひ出さす——なる  
ま——平八いぐせんとのごまひは  
平八何ぢ、此座ある——さ報——後  
ろ——いち勢りともつこうちひ  
くよ何のしご事なごま早とま——

いまくとつひけま

内府公も上意の事あまは是非ろく平、  
八ととまひさまけら平八此座形よ  
此去園よめるとさ伏兵とま——て付  
ごまらんと用意——四方とんま  
けまとも何の事もろく程奥へ入け  
ま、大谷刑部中捕まごまてしごまひ  
此前よまごまけま、大岡、此上座よ

入らせしよひけりよさよ平八御前  
よかーこまるとさよ大園作せし  
けるハ眼回ハるやうりーあとうさ  
ありけるよ平八あつとも警子ー  
てやうやうハ蟻螂々芥とことや  
少ハと平上げらしよさよ近習よ作付  
らせ彼くくハ率ハ玄ノ忠信ハ具  
是と持来せとありけしハ志く

ありてお人ーて持来るハ平八  
よ作せしけらハ我今まては具是  
と持居て我ハよあひくハ若士ハあ  
ふハんと年月思ハくはとも今ま  
あふハハ勇士ハ海ハ我ハ  
あふハハ武士ハあハ若ハりとして  
下さハけしハありくハとあ人  
て持来りー具是のくハみとて

引上置とらるゝことくゝよとソソくさけ  
る由座よありあり福富長馬のち史加飯  
清西と始と一してたよ恐は舌とある  
と一ける大岡忠吉ける平八と認て  
見んとて平八今の所さしくさみ  
れよさ力ありつゝあしよは具足と我  
々希よしてた一武者ありと見せよとめ  
了けよ平八の辞退一けよとも強て

作せしつゝあよつゝは録教よ立出て  
具足と為一由目よかけるをさよ鬼  
祓もかくやらんとととんえよける  
大岡忠吉を新と見よまひあかりして  
んとてさしく武者あり殊よたか  
れ剛士ありつゝあしよ力の如と見ん  
とのゝまひけよ畏りゆとして由座よ  
飛りた松のありけよと根こさあ一

ニウリニウリウリしてと此国よをけり  
人園思ふやいは新うると程もあふ  
りゝゝ如何うも事とら仕出さんとし  
首尾よく此職ととりささげり平八  
はあよ悦ひいさして向ふくと急さ  
けり

内府公平八いりりゝんと定し付  
れゝゝゝんと此の元りく此を園よ

て此出あされむと教人その道  
筋く出させ給ゝまふよ平八あふり  
りくしてとつりけるを勇氣の布とと  
を感ゝゝまひける今よ其是か多  
家の什物よしてありとらん

掃菴雜談  
石印餘史

一 天正十八年平八忠勝上総國小多在  
始めて入部すお波弾山小彌頼定入江  
慶岸々舊屋と振さ縁と共一とす



頼定同國万在城よ位一して武畧あり  
よ依て世人万在少弼と稱一しり  
忠勝を事蹟と聞さふ故、謙信信玄よ  
劣らざる人傑りしんと歎賞一  
毎よ舊居よ先主のちと死に同い小  
多在村傍よ彈弓、鉅繩の城壁の基跡  
と見て城築よも精功ありと感一け  
川、後半關原の役よを鉅繩よ習い

忠勝、此の流平一廣く一して我よ勝ん  
て兵と侮るよ迷りり一とよ 大ニ川志

一 名護、此五陣の内よ

家康公家中一人足利利家の陣場  
よして水と汲ゆ何方のものともい  
下藤外は、谷ありくやらん利家  
の内れ下人たるさゆよ一は方の家中  
元丈と聞取あり、右方利家の陣而



家中一疋の小疋一疋借り大勢よして之に  
利家の内疋も其具為せぬと有りて  
秩肥よ大繩ともしさみん用為難  
事よ名服部半蔵肌ぬさ鬼早り之も  
以方の疋一圓さつす中勢新て  
引取中さるのよ中勢まよて  
すハ大りも我出来一さ新  
家康公子細と聞せし疋笑りて疋在

ゆよー 板坂卜布記

一 慶長元年のころ秀吉伏見よ疋在城外  
さし右壬午年言藤陣扱よ疋成壬辰  
矣國より遊撃と中者来朝任り秀吉  
ろ一薬と上右疋服用外さし右て疋氣色  
何とりく悪く疋成外さし右同二年六  
月十五日のころは疋氣色疋勝進外さ  
さすひとくくと任り同十六日此夜

何方よりと申事し此座りく伏見  
申下し騷動任り右往左往よさのさ  
少くとも何事此座りく志のまりし  
過く香吉公此氣急此重り忍しく此座  
申一日く諸人各元此登城あさ此さ  
下し騷さしるを常

権現極よ此下此夜後の森よ此座あ  
さ此申忠勝棟と右させし此作付

ら此の夜く騷動任り右何より騷さ  
此極子よ是あり此武亦早り早く此  
し此り此と作付し此忠勝棟との  
まく此馬よ此右あさ此此早りの者  
より右連ら此伏見中此急早い  
さ此此とも一圓さのさ此此知此中  
さす此よつさ早速此取りあさ此此  
作しし此此日も別條此座りく静り

中川よー一 此帝ハ江戸より志勝極兵  
部及武部及此二人皆々伏見ハ此借外  
ささゆよつさ兵部及よて此能ハとも  
沙汰任りゆへとも布施源兵部ハ遣一志  
勝極のよー一志々ももて世馬よて盛  
あさささ小紫位よ紫まよつさ此と水り  
ゆー一 心ヤハ 本多家武功圖書  
一 石田治部少輔及作せし斗ハ仁集院

幸儀事上極の此目よ然り昵近目前の  
者方々と成改成せし事よて此故  
る願成ささゆてし志々ももて世馬よて盛  
川ゆよつさ羽林極言雄よ此寺願あり  
はとさ久國言雄よ此見旦よ事あり折  
帝伏見より大山之二此使よ事あり極  
子ハ大坂よ事ありささ一と雜院よ  
つさ惟新極此哉のよー一 急と昔事あり

比より久國も即此職中大坂へ赴く  
洛沢よて

内府極元中書後藤京式部殿外と  
数百騎一勢こ引分てしりて皆下よ  
ハ鑑と為し上よ烟織と為てし曹ハ紙  
よて包と持て

内府極と大田殿と入組是あり申之在外  
諸大名元の仕事餘多是ありし程

雜記中ハ一とも皆無事よお跡甲辰四月  
少担取此中國右の仕事とも別よ記す

久國傳信

一 治部少輔礼の節

権現極元中書後藤与殿への仕事よハ天下  
分目の合戦外とありさるる何方  
よてありさる此極元と此極元とも  
作後与殿此徳よハ合戦仕指中ハと作上

らまのそと後忠勝極く此處ありといふ事  
關東然りと作らるる事重なりて井  
伴兵部極く此處の常し國前より  
まよふ事以後作源書版へて百金懸  
任事とす古戦場の儀何事か能と存  
ゆと重て此處ありといふ事關東よ  
く此處ありといふ事關東より  
うらまの事

権現様三人の存ありと上意よ  
て此處ありといふ事關東より  
一いよく石田謀報の聞えありは  
勢捨使より江部少輔はよと聞て  
鏡山まで追よ出作和山國道山海の  
珍物金銀諸道具数と盡一日よて此  
一して返りける中勢を寶よ目  
まよふけりとも堀の草と取堀あり



と雲直一と云ふりよしてサ一も  
留事外一人の留は皆虚言りりと披  
家せしれける中書と此題ひめえさ  
事りしぬい主後何の沙汰もあらず  
暫くは徳りり

或はよ古老の武士の口く石田謀叛の  
ん掛

内府に此合恐る事とも不事と老いさ

とよつさして不事も主通りいん及  
ひけしとも口さすと何の留りあ  
一と披露しとさるとよ 當代記

一 権規極系勝也退治よ此わりのとさ駿  
河よ此還留成さし此相夕只誓の事よ  
此かり成さし此系勝と此攻成さるさ  
此用急ありり一よ不事申勢は  
と此棟一と存せし此沸煎一



如くはゆよを時かしも正前よ誓師元  
正集めよささ繩の條めよ正吟末正座外  
ささよ

権現様中書何よと作しよる生時中書  
あしよ上夜事正座外して死者人よ正  
のけよとよしよる

権現様奥の目よ正入中書上よる只今系  
勝よ正攻成さよるさよめ是よして沸哉

成さよ生支夜あよるす朝夕誓の  
事よ正かり成さよしてしよるよ  
是よ正逗留のうち必定上方よ礼と記  
— 正しの正座めよくよ如何成さよる  
くよとよしよる

権現様よ生よ以中の作よつけよ見甲  
ろりと作せよる中誓あよくよ正家  
れ滅亡と存よるよとよしよるよ

権現様の御手よして中書口とひと  
とさへ成さしたまはせくはや  
ぬ天卜とくはねりり子細はや  
よして京勝とらとやらす  
とつらぬ上方て礼とおこさぬり  
乞ふとよすうちよ上方よ報送と  
記す一とさあは乞りあて  
上方の送らめとあはる人ん為

りりさすは天下に我ものりて  
夕まはとあはも國持よる事  
アと作せし中書さやい  
一徳の目出度儀よ此座として退す  
果してを通りよるを後よ中書は  
事と村よは語は前座  
作らる事さすの巫のこ  
あはるは答よ國下さる事と作

古々事ハとあはくハと立腹  
古々古人物語

一 江戸嗣君ハ七月廿四の夜半過ル宇治  
宮と此引拂あさ此翌日晚京ト小山ハ此  
為ありてしけ此ハ中書忠勝井伴  
兵部直政も同ト小山ハ此ト此ルリ  
所ハ

中納言極ハ此對面あさ此中書井  
伴兵部酒井右馬ノ尉家次人ハ保治右馬  
忠作大次郎出羽守忠政平岩主計院親  
吉牧野右馬允康成中書豊後守康重石  
川長門守康通松平玄蕃院家清菅沼  
織部正定豊後守備大佐数輩ト此ト此相  
談ありト此指當リト此京勝ト此退  
治ありト此又京勝ト捨テ上方の敵  
ト此退治ありト此此後區ト此

面々の所存とヤリヨリ酒井正康の  
尉家沢中一ける、京勝と捨し上方正退  
治めささく、但借大和と古し作後  
ささく、さ、本國一死海度存せし  
し、く、國よ海りて時常と徳之  
一又國よ海りてし功と立し  
んん、  
所而と江戸よありて、中常と達せし

之、一と作圍り、之箱根と限し、指國  
め、日本、措て、論せし、能合、大明天竺、  
、勅さ、事、とも、三、爲、一、り、東、一、入、一、  
ら、す、と、ヤ、さ、さ、け、る、井、伴、兵、部、少、輔  
直、政、中、さ、さ、け、る、箱、根、山、と、要、害、と、一  
之、爲、と、堺、目、と、す、る、と、さ、さ、は、是、古、樂、此  
て、し、て、し、も、く、り、よ、し、自、ら、岳、籠、り、し  
る、も、の、り、り、我、能、し、る、り、よ、駿、府、以





攻亡一ゆり京勝ハ遂ハ、獨ちふ一ハ生  
上家上ハ義光あり岩手澤ハ改宗あり  
越後ハ秀治あり皆沸方なり二人の  
大北會津トイハルハトハ京勝ヤ  
ハハ思ハルハ都ハ攻上ラカカ  
ハハ今考ヘルハ治部少輔王城  
ハ旗ト立テ名ト秀頼ヲハ他トハ  
大軍思ハルハ累リ大事ハ及ハルハ

不義の名ト負シ天下の進マサルハ  
と攻めハ危ハ事ハありヤ我者  
ろ皆任ハルハ結城少北反ハ人数ニ方  
つけテ京勝ト押ハ  
沸取ハ後軍ト石連ハ濃尾張ハ折シ  
出サセ急ハ輝ト江州濃の境ハ年  
ハたヨリハ功即時ハヨクハ作所  
義宣送ルハとも父義重ハ所限の域ハ



ありて此味方中一丁百上ハ義宣遂ニ  
父と弁へ〜〜すあ〜〜と〜〜始終ハ  
此味方より相馬利胤も京勝一味より  
と〜〜とも小身の家々此ハ物のかす  
〜〜あ〜〜す只一刻も早く江戸へ  
此等と〜〜此後大谷と元尾州濃州  
境までしきつさ〜〜此を相方とあ〜〜ふ  
し此出馬あさ〜〜く〜〜但柳原武大  
幸

ハ海らと此後あさ〜〜此極あ〜〜さ〜と  
中さ〜〜此け〜  
沛而も諸人此中書儀〜同世〜此  
そ夜の此評定ハ果〜けりさ〜わ〜  
柳原武大補康政ハ大田原まで教向  
〜明後日ハ白川表へ推告ハ〜んと任  
けら〜宇都宮〜り

黄門君此月筆とりさ〜此け〜ハ十五里

と夜通し推し小山へ逃げりけり  
御前へ出さし京勝も退治めり  
又上方へ進軍めりさるる  
御前へけり式部大輔承りも敢す  
京勝も剛敵よしし  
りり上方の敵も弱敵よし  
敵腹心の病りり  
表も川原上落めり  
表も川原上落めり

よし一戦も勝負と極り  
よし退治めり上松も獨り  
よし軍京伏見も充滿して  
後り

御前へ京勝と御前へ  
と思ひ御前へ急り  
よし御前へ勝利も目の前  
あかりし箱根も井川の要害と頼み

あまのうらすの早く水上浴あさく  
くは兵の秘述と貴心事兵書しもの  
ゆと中うらすのけははは人抱は機嫌  
よく中書中書と古て式大うらす  
生方と同意りり一時も早く水上浴  
あまのうらすと作あさくはり 東國太平記

藩鑑卷之百十七目錄

は部二十九

本多中務大輔藤原忠勝